

『説文解字繫伝』反切校勘記（４） —内的再構による—

東ヶ崎 祐一

キーワード：『説文解字繫伝』、反切、校勘、内的再構

はじめに

本稿は「『説文解字繫伝』反切校勘記（１）—三本異同考・上—」（東ヶ崎 2008）、および「『説文解字繫伝』反切校勘記（２）—三本異同考・下—」（東ヶ崎 2009）、「『説文解字繫伝』反切校勘記（３）—内的再構による—」（東ヶ崎 2016）の続編である。底本・形式・凡例その他については（１）および（３）を参照されたい。

校 勘

14-3b-3 向 許丈反

「向」は『広韻』で「許亮切（漾韻開口曉母、また「式亮切（漾韻開口書母）」の音もあり）」。これに対し「丈」は養韻であり、声調が合わない。

校勘記（３）の「珣」の項で述べた通り（東ヶ崎 2016、p.69-70）、本来は「許仗反」であった可能性がある。

14-6a-6 害 恒艾反

「害」は『広韻』では「胡蓋切（泰韻開口匣母）」。これに対し「恒」も匣母であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ同音字「姪」「遼」の反切が「恒艾反」であることからすると、「恒」は「恒」の誤りであり、本来の反切は「恒艾反」であった可能性がある。

14-13a-6 疍 具俱切

「疍」は『広韻』では「舉朱切（虞韻見母）」だが、大徐本や『篆韻譜』では「其俱切（虞韻群母）」であり、『集韻』で義注に「説文」とあるのも群母音（權俱切）である。

この反切は「〇〇切」で表されていることからわかるように、大徐本からの竄入である可能性が高い。大徐本の反切「其俱切」の反切上字が（下字の影響？で）「具」となったのが「具俱切」であると考えられる。

14-15b-5 疍 古語反

「疍」は『広韻』では「古暮切（暮韻見母）」。これに対し「語」は語韻であり、韻母が合わない。

同音字「固」の反切が「古路反」であることからすると、「語」は「路」の誤りであり、本来の反切は「古路反」であるとみられる。

なお馬俊良刻本ではこの反切を「古悟反」に作る。「悟」は暮韻字なので反切に問題はなくなるが、これを繫伝反切の下字に使った例がない。おそらく汪啓淑本を再刻した際、字音と反切が合わないことを不審に思い、「語」を「悟」に改めたのであろう。

14-18b-3 罍 莫推反

「罍」は『広韻』では「莫杯切（灰韻明母）」もしくは「莫佩切（隊韻明母）」。これに対し「推」は脂韻もしくは灰韻である。

「推」には灰韻音（『広韻』他回切）もあり、繫伝反切も「土回反」のため、誤りとしにくい処理もできようが、同音字（梅など）の反切が「莫堆反」であることからすると、むしろ「推」は「堆」の誤りであり、本来の反切は「莫堆反」であったと推測される¹。

14-19b-5 置 走雅反

「置」は『広韻』では「子邪切（麻韻三等開口精母）」。これに対し「雅」は馬韻であり、声母が合わない²。

繫伝反切で麻韻三等を表すのに用いられる、「雅」に類似の字画を持つ字を探すと、「邪」がある。おそらく「雅」は「邪」の誤りであり、本来の反切は「走邪反」であったのではないか、と推測される。

14-25b-1 黻 眠雉反

「黻」は『広韻』では「猪几切（旨韻開口知母）」。これに対し「眠」は明母であり、声母が合わない。

同音字「夂」「襍」の反切が「胝雉反」であることからすると、「眠」は「胝」の誤りであり、本来の反切は「胝雉反」であると考えられる。

15-4b-3 伴 蒲晚反

¹ 既に反切校勘記（1）の「咍」の項で触れたように（東ヶ崎 2008、p.134）、繫伝反切では、ある字の反切から導き出される音と、その字が反切に用いられるときの音が一致しないことがままある。

ここで「推」を反切下字に用いている反切を見るに、脂韻には「戮：揆推反（脂韻三等合口群母）」「迫：轉推反（脂韻合口知母）」、灰韻には「恢：庫推反（灰韻溪母）」「僞：來推反（灰韻来母）」そして「罍：莫推反」の計5例が見つかる。「恢」「僞」については後述するがそれぞれ「庫摧反」「來堆反」の誤りであるとみられ、一方で「戮」の反切も「揆推反（脂韻四等合口群母の「葵」と同一反切、類推によるものか）」の誤り（張慧美 1988、p.156）とみられるため、確実例は脂韻の「迫：轉推反」1例のみとなる。

² かりに「置」が「走雅反」で表される音を持っていたと仮定しても、この反切を素直に解釈すればその音は「馬韻二等開口精母」という、中古音の音結合規則に外れたものになってしまう。そもそも、この反切は上下字ともに洪音であるため、帰字が細音（三等介音を持つ）にはなり得ない。仮撰字で声母が精母をはじめとする精組字である場合、その字は三等開口以外にあり得ないと、いささかトリッキーな解釈をする余地もありそうだが、むしろこの場合、いわゆる反切門法の「精照互用」のように、反切上字の精母が莊母と解釈される可能性の方が高いであろう。

なお、反切校勘記（3）（東ヶ崎 2016）で取り上げた「置」と同音の「釐」の反切「走嗟反」（p.79）についても、「走差反」と訂する立場があるが（巖 1943、p.25）、「置」と同様、「反切上下字ともに洪音、帰字が細音」となる問題が生じてしまう。

「伴」は『広韻』では「薄早切（緩韻並母）」「蒲半切（換韻並母）」。これに対し「腕」は阮韻であり、韻母が合わない。

「薄早切」の同音字「叛」「畔」の反切が「蒲腕反」であることからすると、「腕」は「腕」の誤りであり、本来の反切は「蒲腕反」であると考えられる。

15-6a-3 偃 己卓反

「偃」は『広韻』では「於角切（覚韻影母）」。これに対し「己」は見母であり、韻母が合わない。

同音字の多く（握など）の反切が「乙卓反」であることからすると、「己」は「乙」の誤りであり、本来の反切は「乙卓反」であると考えられる。

15-6b-4 依 於幾反

「依」は『広韻』では「於希切（微韻開口影母）」。これに対し「幾」は微韻（2音）・尾韻・未韻の計4音を『広韻』に載せる。

同音字（衣など）の反切が「於機反」であることからすると、「幾」は「機」の誤りであり、本来の反切は「於機反」であると考えられる。

15-12a-4 儻 來推反

「儻」は『広韻』では「魯回切（灰韻來母）」もしくは「落猥切（賄韻來母）」。これに対し「推」は脂韻もしくは灰韻である。

前述「罍」の例と同様、「推」に灰韻音はあるものの、平声の同音字「雷」「櫺」の反切が「來堆反」であることからすると、「推」は「堆」の誤りであり、本来の反切は「來堆反」であるとみられる。

16-3a-2 禡 覩桃反

「禡」は『広韻』には「直誅切（虞韻澄母）」「都牢切（豪韻端母）」「直由切（尤韻澄母）」の3音を載せる。「覩桃反」はこのうち豪韻音と一致、また大徐本の音も同じである。

しかし繫伝反切においては豪韻端母を示す「刀」の反切が「得高反」であり「覩桃反」とは一致しないこと、『篆韻譜』において「禡」の音が「的遼反（蕭韻端母）」であること、『集韻』にも蕭韻端母音を載せること³からすると、「覩桃反」が本来の反切の形であると断定することはためらわれる。さらに蕭韻端母音を示す反切の多くが「覩挑反」（貂など）であることを考え合わせると、「桃」は「挑」の誤りであり、本来の反切は「覩挑反」であったという推測が成り立つ。

16-3a-7 檐 亦占反

「檐」は『広韻』では「處占切（塩韻昌母、他に「昌豔切（艶韻昌母）」の音もあり）」。これに対し「亦」は以母であり、声母が合わない。

同音字「痾」の反切が「赤占反」であることからすると、「亦」は「赤」の誤りであり、本来の反切は「赤占反」であるとみられる。

³ただし『篆韻譜』でも『集韻』の同項目でも、「禡」は本来『説文』では項目を異にしている「禡」と同字という扱いになっている。なお「禡」の繫伝反切は「覩挑丁了二反」で、「覩挑反（蕭韻端母）」と「丁了反（篠韻端母）」の2音があるとなっている。

16-9b-7 屈（屈） 居屈反

「屈：居屈反」は、反切下字と帰字が同一で、一見反切の体を為していないように見える。

ここで「屈」の音を見るに『広韻』で「區勿切（物韻溪母）」と「九勿切（物韻見母）」の2音がある。このうち『広韻』溪母音の意味は「拗曲」「姓」、見母音の意味は「地名（良馬の産地）」「姓」であり、『説文』の説解「無尾（也）」⁴に一致するものはないが、『集韻』を見るに、見母音に「説文無尾也（以下略）」とあり、説文の説解に一致する意味の音としては見母音が考えられていたことがわかる⁵。

反切校勘記（1）の「華」の項（東ヶ崎 2008、p.130）で述べた通り、繫伝反切においては、反切の帰字と上下どちらかが一致するものがあり、そのような場合、反切に用いられる字の音は代表的音に基づき、帰字の音は『説文』における本来の音とされるが一般的ではないものである。この「屈：居屈反」も、そのような例の1つであると見るべきであり、訂正の必要はないと考えられる。

16-14a-7 𦉳 復宣反

「𦉳」は『広韻』では「𦉳」に作り「附袁切（元韻奉母）」。これに対し「宣」は仙韻であり、韻母が合わない。

同音字の多く（煩など）の反切が「復喧反」であることからすると、「宣」は「喧」の誤りであり、本来の反切は「復喧反」であると考えられる。

16-18a-2 𦉳（飲） 九沈反

「𦉳」は『広韻』では「於錦切（寢韻影母）」。これに対し「九」は見母であり、声母が合わない。

「九沈反」は「錦（寢韻見母）」の反切に用いられているので、これが本来の反切である可能性もあるが、「𦉳」に見母音があった形跡はない。むしろ「九」は「乙」の誤りであり、本来の反切は「乙沈反」であった、という可能性の方が高いであろう。

17-4a-5 𦉳 走彦反

「𦉳」は『広韻』では「之膳切（線韻開口章母）」。これに対し「走」は精母であり、声母が合わない。

同音字「戰」の反切が「正彦反」であることからすると、「走」は「正」の誤りであり、本来の反切は「正彦反」であるとみられる。

17-4b-4 𦉳 云遇反

「𦉳」は『広韻』では「羊戍切（遇韻以母）」。これに対し「云」は云母であり、声母がやや異なる。

繫伝反切では以母と云母開口、匣母四等が合流しているが、云母合口は独立を保っていること（梅 1993、p.23）、および同音字「論」の反切が「玄遇反」であることを考えると、「云」は「玄」の誤りであり、本来の反切は「玄遇反」であるとみられる。

17-5b-1 𦉳 前昭反

⁴ 小徐本は「也」を欠く。

⁵ 『集韻』での溪母音の意味は「曲也、請也」。なお『集韻』には物韻群母音もあり、義注は「博雅短也，一曰無尾（以下略）」とある。

「醜」は『広韻』に「昨焦切（宵韻從母）」、「即消切（宵韻精母）」、「子肖切（笑韻精母）」の三音を載せる。「前昭反」の反切はこのうち「昨焦切」と一致する。

しかし、繫伝反切においては宵韻從母音を示す反切は「樵：自超反」「落：前焦反」であり⁶、「前昭反」は他に用いられていない。また、宵韻精母（焦など）の音を示す反切が「煎昭反」であることを考え合わせると、むしろ「前昭反」は「煎昭反」の誤りであり、本来の反切は「煎昭反」であったとみるべきである。

17-14a-6 愧 呼跨反

「愧」は『広韻』では「呼覇切（禡韻合口曉母）」。これに対し「跨」は『広韻』に見えないが、『集韻』では「苦瓦切（馬韻合口溪母）」であり、声調が合わない。

同音字（化など）の反切が「呼跨反」であることからすると、「跨」は「跨」の誤りであり、本来の反切は「呼跨反」であると考えられる。

17-14b-4 禺 疑預反

「禺」は『広韻』では「牛具切（遇韻疑母）」。これに対し「預」は御韻であり、韻母がやや合わない。

繫伝反切では遇撰三等去声所属韻（御韻と遇韻）の反切下字通用がみられるため、この「禺：疑預反」も異とするに足りない。ただ、同音字「遇」「寓」の反切が「疑豫反」であることからすると、「預」は「豫」の誤りであり、本来の反切は「疑豫反」であった、という可能性もある。

18-5b-4 庖 昌妓反

「庖」は『広韻』では「尺氏切（紙韻開口昌母）」。「妓」も紙韻であり、反切として問題はないように見える。

しかし、同音字の多く（侈など）の反切が「昌婢反」であることを考えると、あるいは「妓」は「婢」の誤りであり、「庖」の本来の反切は「昌婢反」であった、という可能性もある。

18-6b-4 廖 梨桃反

「廖」は『広韻』では「寥」に作り「落蕭切（蕭韻来母、また「郎擊切（錫韻開口来母）」の音もあり）」。これに対し「桃」は豪韻であり、韻母が合わない。

「桃」は「挑」の誤りであり、本来の反切は「梨挑反」であると考えられる。反切校勘記（1）の「遼」の項（東ヶ崎 2008, pp.116-117）参照。

18-7b-1 厝 後古反

「厝」は『広韻』では「當古切（姥韻端母）」または「侯古切（姥韻匣母）」。「後古反」はこのうち匣母音の方と一致する。

しかし繫伝反切においては、匣母音に用いられる反切は「戸雇帖帖：桓土反」「帖：胡故反」「鄂：下古反」「苜：桓古反」であり、「後古反」の例は1つもない。また端母音を持つ字（覲など）の反切が「得古反」であることからすると、本来の反切は「得古反」であり、「後古反」はその音が匣母音と一致しないことを不審に考えた後世の人が反切上字を替えたものという推測が成り立つ。

⁶ この他に「顛：昨焦切」があるが、反切の形式を見ればわかるように大徐本のものである。

18-8a-7 炆 烏萬反

「炆」は『広韻』では「芳万切（願韻敷母）」。これに対し「烏」は影母であり、声母が合わない。

『集韻』には「于願切（願韻合口云母）」の音がみえるが、繫伝反切のものとは影母と云母の差があるため、単純に一致するとは言えない。繫伝反切には願韻合口云母相当の音を表す字は現れず、願韻合口影母は「怨：迂券反」「怨：迂勸反」である⁷。一方、願韻敷母を表す反切は「媿：符萬反」「媿：符販反」「畚：服萬反」であり⁸、これと合流していたとみられる願韻非母音の反切も「販：方萬反」である。これらの中に「烏萬反」に類似する反切は見当たらない。

本来の反切がどうであったのかは不明としか言えないが、あるいは影母と云母の合流後に、「符萬反」の反切上字を「烏」に替えたものか。待考。

18-9b-1 碑 披移反

「碑」は『広韻』では「彼爲切（支韻三等幫母）」。これに対し「披」は滂母であり、声母がやや合わない。

同音字（陂など）の反切が「彼移反」であることからすると、「披」は「彼」の誤りであり、本来の反切は「彼移反」であると考えられる。

18-11a-5 肆 素水反

「肆」は『広韻』では「息利切（至韻開口心母）」。これに対し「水」は旨韻（合口）であり、声調が合わない。

同音字の多く（泗など）の反切が「素次反」であることからすると、「水」は「次」の誤りであり、本来の反切は「素次反」であると考えられる。

18-15a-3 豹 閑縛反

「豹」は『広韻』では「下各切（鐸韻開口匣母）」。これに対し「縛」は葉韻であり、韻母がやや異なる。

繫伝反切においては宕攝一等韻と三等韻は反切下字が通用する例があり⁹、これもその例とみなすことはできる。しかし鐸韻と葉韻の間での反切下字通用の例がこれ以外にないこと、また同音字（涸など）の反切が「閑博反」であることからすると、むしろ「縛」は「博」の誤りであり、本来の反切は「閑博反」であるとみるべきである。

19-1b-3 騏 虞知反

「騏」は『広韻』では「渠之切（之韻群母）」。これに対し「虞」も群母であり、また「知」は支韻だが繫伝反切では支脂之三韻の間での反切下字通用が多く見られるため、反切に問題はないように見える。

ただ、同音字の多く（旗など）の反切が「虔知反」であることからすると、むしろ「虞」は「虔」の誤りであり、本来の反切は「虔知反」である可能性がある。

⁷ この他に「媿：迂眷反」があるが、これは「迂券反」の誤りとみられる（後述）。

⁸ ただしこれらは全て反切上字が奉母であり、不審。願韻奉母の繫伝反切は「飯爨：服萬反」。

⁹ 「倉：切陽反」「壯：側浪反」など。

19-4a-4 駮 偶指反

「駮」は『広韻』では「五駮切（駮韻開口疑母）」。これに対し「指」は旨韻であり、韻母が合わない。

同音を示す繫伝反切は現れないが、「指」と字画の近い駮韻字を探すと「楷」がある。「楷」は「駮：侯楷反」のように反切下字に用いられる例もある。ここから「指」は「楷」の誤りであり、本来の反切は「偶楷反」であったと推測される。

19-5a-3 駘 田台反

「駘」は『広韻』では「徒哀切（哈韻定母、他に「徒亥切（海韻定母）」の音もあり）」。これに対し「台」も哈韻であり、反切に問題はないように見える。

ただ同音字の多く（臺など）の反切が「田哈反」であることからすると、「台」は「哈」の誤りであり、本来の反切は「田哈反」である可能性がある。

19-5b-1 駮 鷓穴反

「駮」は『広韻』では「苦穴切（屑韻合口溪母）、ほかに「苦夬切（夬韻合口溪母）」の音もあり）」。これに対し「鷓」は定母であり、声母が合わない。

同音字の多く（決など）の反切が「鷓穴反」であることからすると、「鷓」は「鷓」の誤りであり、本来の反切は「鷓穴反」であると考えられる。

19-6b-7 麇 己京反

「麇（『広韻』擧卿切、庚韻三等開口見母）」と「京」は同音であり、「己京反」は反切の体を成していない。

同音字（驚など）の反切が「己英反」であることからすると、「京」は「英」の誤りであり、本来の反切は「己英反」であると考えられる。

19-7a-3 麇 古兮反

「麇」は『広韻』では「古攜切（齊韻合口見母）」。「古兮反」の反切も齊韻合口見母を表すものとして問題はないように見える。

しかし繫伝反切においては、「古兮反」が齊韻開口見母の音を表すのに用いられ（雞など）、齊韻合口見母の音を表すのにはもっぱら「涓兮反」が用いられている（圭など）。大徐本の反切が「古攜切」であることからすると、「古兮反」の反切上字は大徐本からの竄入であり、本来の反切は「涓兮反」であったと推測される。

19-9a-1 狎 鷲解反

「狎」は『広韻』では「薄解切（蟹韻並母、他に「歩皆切（皆韻並母）」の音もあり）」。これに対し「鷲」は影母であり、声母が合わない。同音字「罷」の反切は「歩買反」であり、参考とはならない。

「鷲」に類似した部分のある並母字を探すと「鵬」がある。「鷲」には異体字として冠脚を偏旁にした「鷲」があり、これが「鵬」に誤られた可能性がある。「鵬」は繫伝反切に用いられた例がないが、他に適当な文字も見つからない。本来の反切は「鵬解反」であった可能性がある。

19-9a-3 默 沒墨反

「黙（『広韻』莫北切、徳韻明母）」と「墨」は同音であり、「沒墨反」は反切の体を成していない。

同音の「墨」「覓」の反切が「沒黒反」であることからすると、「墨」は「黒」の誤りであり、本来の反切は「沒黒反」であると考えられる。

19-11a-2 狎 俟甲反

「狎」は『広韻』では「胡甲切（狎韻匣母）」。これに対し「俟」は崇母であり、声母が合わない。

同音字「匣」の反切が「俟甲反」であることからすると、「俟」は「侯」の誤りであり、本来の反切は「侯甲反」であるとみられる。

19-14b-1 燁 畢聿反

「燁（『広韻』卑吉切、質韻四等幫母）」と「畢」は同音であり、「畢聿反」は反切の体を成していない。

同音字（畢など）の反切が「卑聿反」であることからすると、「畢」は「卑(卑)」の誤りであり、本来の反切は「卑聿反」であると考えられる。なお反切校勘記（2）の「濯」（東ヶ崎2009、p.75）も参照されたい。

19-19a-3 黜 多幹反

「黜」は『広韻』では「當割切（曷韻端母）」。これに対し「幹」は翰韻であり、韻母が合わない。

曷韻、もしくはその合口韻である末韻から「幹」に似た文字を探すと、「幹」がある。「幹」は「牀牀：戸幹反」のように繫伝反切の下字に用いられた例がある。ここから、「幹」は「幹」の誤りであり、本来の反切は「多幹反」であった、という推測ができる。ただし「幹」は末韻であり、繫伝反切では曷韻と末韻の反切下字通用が、末韻唇音が曷韻に用いられる以外には見られないため、「多幹反」を本来の反切と考えることにはわずかに不安が残る¹⁰。

なお同様の理由で、同音を持つ字「怛：多幹反」も本来は「多幹反」であったと推測される（後述）。

20-2b-3 𠂔 齊食反

「𠂔」は『広韻』では「阻力切（職韻開口莊母、他に「練結切（屑韻開口来母）」の音もあり）。これに対し「齊」は従母であり、声母が合わない。

同音字（の多く）（側など）の反切が「齋食反」であることからすると、「齊」は「齋」の誤りであり、本来の反切は「齋食反」であると考えられる。

20-6b-6 奕 移亦反

「奕（『広韻』羊益切、昔韻開口以母）」と「亦」は同音であり、「移亦反」は反切の体を成していない。

¹⁰ 嚴(1943)や張世祿(1944)の反切系聯を見るに、末韻唇音（並母を除く）は曷韻や末韻非唇音系（並母を含む）とは別の類を成している可能性がある。末韻唇音のグループには他に末韻影母・匣母と曷韻透母の一部が含まれるが、ここに曷韻端母の一部も含まれることになる。『集韻』では曷韻舌齒音が末韻に転入しているが、それと関係ある現象か。

同音字のいくつか（亦など）の反切が「移赤反」であることからすると、「亦」は「赤」の誤りであり、本来の反切は「移赤反」であると考えられる。

20-10b-5 恢 庫推反

「恢」は『広韻』では「苦回切（灰韻溪母）」。これに対し「推」はは脂韻もしくは灰韻である。

「推」を誤りとせずそのまま認める処理もできようが、さきに「罍」の項で述べたごとく、同音字（魁など）の反切が「庫摧反」であることからすると、「推」は「摧」の誤りであり、本来の反切は「庫摧反」であると推測される。

20-11b-7 憖 梨桃反

「憖」は『広韻』では「落蕭切（蕭韻来母、また「力求切（尤韻来母）」の音もあり）」。これに対し「桃」は豪韻であり、韻母が合わない。

「桃」は「挑」の誤りであり、本来の反切は「梨挑反」であると考えられる。反切校勘記（1）の「遼」の項（東ヶ崎 2008, pp.116-117）参照。

20-12b-6 儻 徒敢反

「儻」は『広韻』では「徒敢切（敢韻定母）」または「徒濫切（闕韻定母）」。これに対し「獫」には檻韻、闕韻、鑑韻の3音がある。

「徒敢反」が「徒濫切」の音を表しているとも解釈しうるが、「獫」の繫伝反切は「荒檻反（檻韻曉母）」であり¹¹、また『広韻』における敢韻音の義注は「安緩」、闕韻音の義注は「恬静」で、説文の説解「安也」に合うものは敢韻音の方であることからすると、その可能性は低いと考えざるを得ない。

敢韻定母の同音字「澹」の反切が「徒敢反」であることからすると、「獫」は「敢」の誤りであり、本来の反切は「徒敢反」であるとみられる。ただし、敢韻定母音として最も有力な繫伝反切は「稻槩反」（淡など）であり、また「儻」の大徐本の反切が「徒敢反」であることを考えると、この反切自体が大徐本からの竄入である可能性もある¹²。

20-14b-5 橘 賜穴反

「橘」は『広韻』では「古穴切（屑韻合口見母）」。これに対し「賜」は心母であり、声母が合わない。

同音字の多く（決など）の反切が「鷓穴反」であることからすると、「賜」は「鷓」もしくはその異体字「鷓」の誤りであり、本来の反切は「鷓穴反」であると考えられる。

20-15b-6 怖 滿會反

「怖」は『広韻』には「普蓋切（泰韻滂母）」「芳廢切（廢韻敷母）」「拂伐切（月韻敷母）」「北末切（末韻幫母）」の4音を載せる。「滿會反」の反切下字はこのうち泰韻音に一致するが、上字は明母で、どれとも一致しない。

¹¹ ただし「荒檻反」は大徐本の反切でもある。

¹² 同様のことは「澹：徒敢反」にも言えそうだが、既に反切校勘記（2）で言及したように（東ヶ崎 2009, p.72）、「澹」の大徐本での反切が「徒濫切」であることからすると、これについては大徐本からの竄入とは考えにくい。

上記の音にはいずれも当てはまらないものの、『篆韻譜』「蒲勾反」や大徐本「蒲昧切」といった反切が表す音は泰韻並母であり、その音を前提とする場合、「滿」は「蒲」の誤りであり、本来の反切は「蒲會反」であったのではないか、という推測が成り立つ。実際、泰韻並母字「旃」の反切も「蒲會反」である。

20-16a-6 怛 多幹反

「怛」は『広韻』では「當割切（曷韻端母）」。これに対し「幹」は翰韻であり、韻母が合わない。

前述「黓」と同様、「幹」は「幹」の誤りであり、本来の反切は「多幹反」であった、という推測ができる。

もう一つの可能性として、大徐本で「怛」の或体とする「悤」との混同により、その音（翰韻端母）を「多幹反」と記した可能性もある¹³。しかし、次項に記す通り「悤」の繫伝反切は「冕散反（兜散反の誤りとみられる）」であり、「多幹反」表記を本来のものとみなすこの説は成り立ち難いと考えられる。

20-16a-7 悤 冕散反

「悤」は『広韻』では「得按切（翰韻端母）」。これに対し「冕」は明母であり、声母が合わない。

同音字「旦」「鳴」の反切が「兜散反」であることからすると、「冕」は「兜」の誤りであり、本来の反切は「兜散反」とみられる。

21-7a-3 漉 卒茲反

「漉」は『広韻』では「息移切（支韻開口心母）」。これに対し「卒」は精母であり、声母が合わない。

同音字の多く（漸など）の反切が「辛茲反」であることからすると、「卒」は「辛」の誤りであり、本来の反切は「辛茲反」と考えられる¹⁴。

21-14a-1 泌 頻未反

「泌」は『広韻』には「兵媚切（至韻三等幫母）」「毗必切（質韻四等並母）」「鄙密切（質韻三等幫母）」の3音を載せる。これらに対し、「頻未反」の示す音は未韻並母であり、上記の音のどれとも適合しない。

質韻四等並母音をもつ字のうち「苾」の反切が「頻朮反」であることからすると、「未」は「朮」の誤りであり、本来の反切は「頻朮反」とみられる。あるいは「未」は至韻音の影響による書き換えか。

21-14a-1 活 古活反

¹³ 大徐本では「怛」の音が「得案切又當割切」となっていて、2字の音をまとめた形になっている。そもそも「悤」の説解も、大徐本「或从心在旦下、詩曰（以下略）」に対し、小徐本は「従心旦口（一字空白、『校勘記』は「聲」を補うべきとする）詩曰（以下略）」となっていて、字義の記述がない。小徐本の依拠したテキストの本文に元来誤脱があったのではないかと推測される。

¹⁴ 反切下字が之韻だが、繫伝反切では支脂之3韻の反切下字の通用が、特に平声で顕著であり、異とするには足りない。

「活」は『広韻』には「戸括切（末韻匣母）」「古活切（末韻見母）」の2音がある。一方、「活：古活反」は反切下字と帰字が同一であり、反切の体を成していないようにみえる。しかし校勘記（1）の「華」（東ヶ崎 2008、p.130）や前述「屈」の項で述べた通り、繫伝反切においては、反切の帰字と上下どちらかが一致するものがあり、そのような場合、反切に用いられる字の音は代表的音に基づき、帰字の音は『説文』における本来の音とされるが一般的ではないものである。「活」においても匣母音が代表音、見母音が説文音とみなしていると考えられる¹⁵。

21-14a-7 溲 梨桃反

「溲」は『広韻』では「落蕭切（蕭韻来母）」である。これに対し「桃」は豪韻であり、韻母が合わない。

「桃」は「挑」の誤りであり、本来の反切は「梨挑反」であると考えられる。反切校勘記（1）の「遼」の項（東ヶ崎 2008、pp.116-117）参照。

21-15a-5 汜 符梵反

「汜」は『広韻』で「孚梵切（梵韻敷母、ほかに「符芝切（凡韻奉母）」の音もあり）」だが、「符」「梵」はともに奉母であり、「符梵反」は反切の体を成していない。

同音の「汎」の反切が「方梵反」であることからすると、「符」は「方」の誤りであり、本来の反切は「方梵反」であるとみられる。

ただし「方」が「符」に直接誤られたというのは、字形の隔たりからするとやや考えにくい。あるいは本来の反切上字は「付」あるいは「府」などであったか。

21-15a-5 漂 片袄反

「漂」は『広韻』では「撫招切（宵韻四等滂母、他に「匹妙切（笑韻四等滂母）」の音もあり）」。これに対し「袄」（「襖」の俗字）は皓韻であり、韻母が合わない。

同音字「嫖」の反切が「片袄反」であることからすると、「袄」は「袄」の誤りであり、本来の反切は「片袄反」であるとみられる。

21-15a-7 泓 烏亭反

「泓」は『広韻』では「烏宏切（耕韻合口影母）」。これに対し「亭」は青韻であり、韻母が合わない。

耕韻と青韻は梗撰二等と四等の関係にあるが、これらの間の明確な反切下字の通用例は見当たらず、「烏亭反」も何らかの誤りを含む可能性がある。ここで耕韻もしくは当時既に合流していたと考えられる庚韻二等から「亭」に類似した字を探すと「亨」がある。ここから「烏亭反」は「烏亨反」の誤りではないかという推測が成り立つ。

21-15b-4 涇 苦龍反

「涇」は『広韻』に「苦紅切（東韻一等溪母）」「女江切（江韻娘母）」「苦江切（江韻溪母）」の3音を載せる。大徐本の反切は東韻音または江韻溪母音（苦江切又哭工切）、『篆韻譜』は江韻音（苦江反）。これに対し「龍」は鍾韻で、韻母が合わない。

¹⁵ 『広韻』でも見母音が「古活切」となっている。なお、説文の説解「水流聲（小徐本では「流聲也）」と一致する意味は『広韻』『集韻』ともに匣母音・見母音の双方に見えるが、『集韻』では匣母音の義注にのみ「説文」の2字がみえる。

「蓬：貧容反」のように東韻一等と鍾韻では反切下字が通用する例があるので、このままでも問題ないようにも見えるが、東韻一等溪母に用いられる反切は「空：口紅反」であり「苦彪反」の例はないこと、江韻溪母の音をもつ字のうち「控」の反切が「苦彪反」であること¹⁶、また「舩」の繫伝反切が述古堂本で「溝彪反」に対し祁篤藻本等で「溝龍反」と誤っていること（東ヶ崎 2008、p.123）を考え合わせると、「龍」は「彪」の誤りで、本来の反切は「苦彪反」であったとみることができる。反切校勘記（1）の「舩」の項で言及したように、「彪」は「龍」の俗字として用いられることもあったため、伝写の段階で「彪」を「龍」に誤訂正したものと推測される。

22-3b-7 繆 梨桃反

「繆」は『広韻』では「落蕭切（蕭韻来母）」である。これに対し「桃」は豪韻であり、韻母が合わない。

「桃」は「挑」の誤りであり、本来の反切は「梨挑反」であると考えられる。反切校勘記（1）の「遼」の項（東ヶ崎 2008、pp.116-117）参照。

22-5a-3 雨 于補反

「雨」は『広韻』では「王矩切（夔韻云母、また「王遇切（遇韻云母）」の音もあり）」。これに対し「補」は姥韻であり、韻母がやや合わない。

夔韻と姥韻は遇摂三等と一等の関係にあり、実際「圃：不雨反」のような反切下字の通用例もあるが、同音字の多く（羽など）の反切が「于甫反」であることからすると、むしろ「補」は「甫」の誤りであり、本来の反切は「于甫反」であると考えられる。張世祿(1944)も同様に「于甫反」に訂している(p.125)。

22-7b-5 贖 五貴反

「贖」は『広韻』では「五怪切（怪韻合口疑母）」。これに対し「貴」は未韻であり、韻母が合わない。同音字の繫伝反切も「額：五夬反」であり、参考にならない。

「貴」に字画の類似した字を怪韻、またこれらと合流していたとみられる卦韻・夬韻から探すと、「賣」がある。「賣」は繫伝反切では卦韻を示す反切下字として常用され、怪韻でも「怪：古賣反」のように用いられる。これらのことから、「貴」は「賣」の誤りであり、本来の反切は「五賣反」であると推測される。

22-8b-1 鱧 蓮弟反

「鱧」は『広韻』では「盧啓切（齊韻開口来母）」。これに対し「第」は霽韻であり、声調が合わない。

同音字「豊」「櫛」の反切が「蓮弟反」であることからすると、「第」は「弟」の誤りであり、本来の反切は「蓮弟反」であると考えられる。反切校勘記（2）の「禮」の項も参照（東ヶ崎 2009、p.72）。

22-9b-6 鮪（鯪） 浦會反

「鮪」は『広韻』では「博蓋切（泰韻幫母）」。これに対し「浦」は滂母であり、声母が合わない。

¹⁶ これについては反切校勘記（1）の同字の項（東ヶ崎 2008、p.129）も参照されたい。

同音字「柿」「跟」の反切が「補會反」であることからすると、「浦」は「補」の誤りであり、本来の反切は「補會反」であると考えられる。

23-1b-2 乳 然拄反

「乳」は『広韻』では「而主切（麌韻日母）」。これに対し「拄」も麌韻であり、反切に問題はないようにみえる。

ただ「拄」は他に繫伝反切に用いられた例がないこと、また同音字「擣」「齏」の反切が「然拄反」であることからすると、「拄」は「柱」の誤りであり、本来の反切は「然柱反」である可能性がある。

23-3b-4 扇 詩椽反

「扇」は『広韻』では「式戰切（線韻開口書母）」または「式連切（仙韻開口書母）」。これに対し「椽」は仙韻であり、「詩椽反」は「式連切」と示す音が一致する。

しかし、『広韻』『集韻』で説文の説解と一致するのが線韻音であること、仙韻開口書母に用いられる繫伝反切は「賒延反」であり「詩椽反」の例はないこと、また線韻開口書母の同音字「偏」の反切が「詩椽反」であることからすると、「椽」は「掾」の誤りであり、本来の反切は「詩掾反」であると考えられる。

23-5b-4 關 許丈反

「關」は『広韻』で「許亮切（漾韻開口曉母）」。これに対し「丈」は養韻であり、声調が合わない。

校勘記（3）の「珣」の項で述べた通り（東ヶ崎 2016、p.69-70）、本来は「許仗反」であった可能性がある。

23-5b-7 闇 歐欽反

「闇」は『広韻』では「烏紺切（勘韻影母）」。これに対し「欽」は侵韻であり、韻母が合わない。

同音字「暗」の反切が「歐湏反」であることからすると、「欽」は「湏」の誤りであり、本来の反切は「歐湏反」であるとみられる。

23-7a-5 聊 梨桃反

「聊」は『広韻』では「落蕭切（蕭韻来母）」である。これに対し「桃」は豪韻であり、韻母が合わない。

「桃」は「挑」の誤りであり、本来の反切は「梨挑反」であると考えられる。反切校勘記（1）の「遼」の項（東ヶ崎 2008、pp.116-117）参照。

23-10a-6 摛 丑离反

「摛」は『広韻』では「丑知切（支韻開口知母）」。一方「离」にも支韻開口知母の音があり、「丑离反」は反切の体を成していない可能性がある。

「离」には支韻開口来母の音（『広韻』呂支切）もあり、それを採用しているならば問題はないかもしれないが、当の「离」の繫伝反切が「丑離反」であることからすると、むしろ「离」は「離」の誤りであり、本来の反切は「丑離反」であると考えべきであろう。

23-12b-3 擢 朱渥反

「擢」は『広韻』では「直角切（覚韻澄母）」。これに対し「朱」は章母であり、声母が合わない。

同音字「濁」「鑄」の反切が「朮渥反」であることからすると、「朱」は「朮」の誤りであり、本来の反切は「朮渥反」であると考えられる。

23-13b-6 拓 貞石反

「拓」は『広韻』では「之石切（昔韻開口章母、また「他各切（鐸韻開口透母）」の音もあり）」。これに対し「貞」は知母であり、声母が合わない。

同音字（隻など）の反切が「眞石反」であることからすると、「貞」は「眞」の誤りであり、本来の反切は「眞石反」であると考えられる。

23-16b-4 抗 香浪反

「抗」は『広韻』では「苦浪切（宕韻開口溪母、また「胡郎切（唐韻開口匣母）」の音もあり）」。これに対し「香」は曉母であり、声母が合わない。

同音字の多く（邗など）の反切が「看浪反」であることからすると、「香」は「看」の誤りであり、本来の反切は「看浪反」であると考えられる。

23-17a-2 撈 白亨反

「撈」は『広韻』では「薄庚切（庚韻二等並母）」または「補曠切（宕韻幫母）」だが、大徐本は「北孟切（映韻二等幫母）」。これに対し「亨」は養韻と庚韻の2音がある。

2字の音のうち韻母が一致するのが庚韻であること、繫伝反切では反切下字に「亨」を用いた例がこれ以外にないこと、また庚韻音の同音字（彭など）の反切が「白亨反」であることからすると、本来の反切は「白亨反」であったと考えられる。

24-6a-1 𪗇 匹乏反

「𪗇」は『広韻』には「孚梵切（梵韻敷母）」「房法切（乏韻奉母）」「起法切（乏韻溪母）」の3音を載せる。これに対し「匹」は滂母であり、声母が合わない。ことに梵韻や乏韻は重唇音と結合しないため、「匹乏反」には何らかの誤りが含まれている可能性が高い。

『篆韻譜』や大徐本の音は乏韻奉母（房法切）であるが、この音を前提とした場合、「匹」に似た奉母字は見当たらない。

可能性としては、「匹」は「丘」あるいは「口」の誤りで、本来の反切は乏韻溪母音を表した「丘乏反」あるいは「口乏反」であった、というものが考えられる。『十韻彙編』に載せる唐写本唐韻を見るに、「𪗇」は乏韻溪母音のみを載せていることも、傍証となるだろうか。また『集韻』に葉韻滂母音（匹𪗇反）のあることから、「匹乏反」がこの音を表した、と考えることもできるかもしれない。ただし繫伝反切で葉韻と乏韻の通用例は見当たらない。

24-6a-7 媿 迂眷反

「媿」は『広韻』では「於袁切（元韻合口影母）」。これに対し「眷」は線韻であり、韻母が合わない。

同音字「怨」の反切が「迂券反」であることからすると、「眷」は「券」の誤りであり、本来の反切は「迂券反」であるとみられる。

24-12a-5 𧄀 于進反

「𧄀」は『広韻』では「於斬切（焮韻影母）」。これに対し「于」は云母であり、声母が合わない。

反切校勘記(1)の「𧄀」の項(東ヶ崎 2008, p133)や(3)の「𧄀」の項(東ヶ崎 2016, pp. 88-89)で触れた通り、繫伝反切では、本来「於」であるべき箇所が「于」となっている例が多数現れ、これもその1つと考えられる。本来の反切は「於進反」であるとみられる。他に「于」を「迂」の誤りとみなした「迂進反」も本来の反切の候補となりうるであろう。

24-13b-1 𧄀 自閑反

「𧄀」は『広韻』では「昨干切（寒韻從母）」。これに対し「閑」は山韻であり、韻母が合わない。

この反切を「蟹摂・山摂一等舌歯音字における主母音の二等韻母音との合流」を反映しているもの(東ヶ崎 2003, pp.41-42)とみなすこともできようが、同音字(殘など)の反切が「自閑反」であることからすると、「閑」は「闌」の誤りであり、本来の反切は「自闌反」であるとみられる。

24-19b-4 弘 戸明反

「弘」は『広韻』では「胡肛切（登韻合口匣母）」。これに対し「明」は庚韻三等であり、韻母が合わない。同音字の反切も、繫伝反切にはない。

「明」に類似した、繫伝反切で登韻の反切下字で用いられる字を探すと「朋」がある。ここから「戸明反」は「戸朋反」の誤りであるという推測ができる。張世祿(1944)も同様に「戸朋反」に訂している(p.147)。

26-10a-3 𧄀 土變反

「𧄀」は『広韻』では「他端切（桓韻透母）」。これに対し「變」は線韻であり、韻母が合わない。

同音字「湍」「𧄀」の反切が「土變反」であることからすると、「變」は「𧄀」の誤りであり、本来の反切は「土𧄀反」であると考えられる。

27-3a-3 𧄀 戸迷反

「𧄀」は『広韻』では「戸圭切（齊韻合口匣母、また「許規切（支韻合口四等曉母）」の音もあり）」。「戸迷反」の示す音はこれと同じで、反切に問題は全くないように見える。

しかし、同音字の多く(攜など)の反切が「勻迷反」であること、および繫伝反切で匣母四等は以母と合流している(梅 1993, p.24, および東ヶ崎 1999)ことからすると、「戸」は「勻」の誤りであり、本来の反切は「勻迷反」であると考えられる。「戸迷反」の反の反切上字は、大徐本の反切「戸圭切」からの竄入であるとみられる。

27-4a-7 𧄀 杯卑反

「𧄀」は『広韻』では「敷羈切（支韻三等滂母）」。これに対し「杯」は幫母であり、声母が合わない。

同音字「旒」「𧄀」の反切が「坏卑反」、「披」の反切が「坯卑反」であることからすると、「杯」は「坏」もしくは「坯」の誤りであり、本来の反切は「坏卑反」もしくは「坯卑反」であると考えられる。

27-8a-3 鈔 側嘲反

「鈔」は『広韻』では「楚交切（肴韻初母）」もしくは「初教切（効韻初母）」。これに対し「側」は莊母であり、韻母が合わない。

同音字「鈔」の反切が「測嘲反」であることからすると、「側」は「測」の誤りであり、本来の反切は「測嘲反」とみられる。

27-10a-6 斷 都伴反

「斷」は『広韻』には「都管切（緩韻端母）」「徒管切（緩韻定母）」「丁貫切（換韻端母）」の3音を載せる。これに対し「伴」は彌韻であり、韻母が合わない。

「斷」の本来の反切を考える上でのヒントとなりそうなものとして、緩韻定母の同音字「鍛」の反切「都伴反」がある。「都伴反」はこの「都伴反」の誤りとも考えられるのである¹⁷。ただしこの字の音は『広韻』では緩韻定母のみ、『集韻』でもこの他に換韻端母（徒玩切）の音があるが、端母音は見当たらない。更に繫伝反切においては「伴」が用いられる反切が「鍛：都伴反」のみである。

さしあたっては疑問が残るものの「都伴反」の「伴」は「伴」の誤りであり、本来の反切は「都伴反」である可能性を提示しておきたい。他にも換韻端母の「鍛：都半反」の例があることから、「都伴反」が「都半反」の誤りである可能性も考えられよう。

27-10b-6 料 梨桃反

「料」は『広韻』では「落蕭切（蕭韻来母、また「力弔切（嘯韻来母）」の音もあり）」。これに対し「桃」は豪韻であり、韻母が合わない。

「桃」は「挑」の誤りであり、本来の反切は「梨挑反」と考えられる。反切校勘記（1）の「遼」の項（東ヶ崎 2008, pp.116-117）参照。

27-12a-5 軺 廷朝反

「軺」は『広韻』では「餘韶切（宵韻以母、また「市紹切（宵韻船母）」の音もあり）」。これに対し「廷」は定母であり、声母が合わない。

同音字の多く（搖など）の反切が「延朝反」であることからすると、「廷」は「延」の誤りであり、本来の反切は「延朝反」と考えられる。

28-3a-3 脛 堅經反

「脛」は『広韻』では「戸經切（青韻開口匣母）」。これに対し「堅」「經」はともに見母であり、「堅經反」は反切の体を成していない。

同音字「邢」「邢」の反切が「賢經反」であることからすると、「堅」は「賢」の誤りであり、本来の反切は「賢經反」と考えられる。更に言えば、同音字のうち「刑」などの反切が「賢星反」であることを考えると、「賢經反」の反切下字は、大徐本の反切「戸經切」からの竄入であるかもしれない。ただし「賢經反」の例が複数個あることからすれば、本来のものであるとみなすべきか。

¹⁷ 「伴」には上声緩韻並母と去声換韻並母の2音があるが、『広韻』では前者の義注が「侶也、依也」、後者が「伴奐、見詩」とあり、一般的に用いられる音が緩韻であることがわかる。反切下字でも緩韻に「伴：普伴切」という例が現れ、これらのことからすると、繫伝反切で用いられる「伴」も、緩韻音を表すものとみられる。

28-4a-6 咳 苟孩反

「咳」は『広韻』では「古哀切（哈韻見母）」。これに対し「苟」も見母であり、反切に問題はないように見える。

ただ同音字の多く（咳など）の反切が「苟孩反」であることからすると、「苟」は「苟」の誤りであり、本来の反切は「苟孩反」である可能性がある。

28-5a-3 𦉑 榮節反

「𦉑」は『広韻』になし、『集韻』では「一決切（屑韻合口影母、他に「呼決切（屑韻合口匣母）」「古穴切（屑韻合口見母）」の2音あり）」。これに対し「榮」は云母であり、声母が合わない。

同音字の多く（扶など）の反切が「榮節反」であることからすると、「榮」は「榮」の誤りであり、本来の反切は「榮節反」であると考えられる。

28-7b-6 禹 牙甫反

「禹」は『広韻』では「王矩切（麌韻云母）」。これに対し「牙」は疑母であり、声母が合わない。

同音字の多く（羽など）の反切が「于甫反」であることからすると、「牙」は「于」の誤りであり、本来の反切は「于甫反」であると考えられる。そしてその誤りの原因として、「禹」の徐鍇注に「牙齒蟲病謂之齲齒」とあることから、この「牙」字の影響を指摘できるだろう。

28-13a-4 孳 則斯反

「孳」は『広韻』では「子之切（之韻精母、また「疾置切（志韻從母）」の音もあり）」。これに対し「斯」は支韻である。

繫孳反切では支脂之3韻の反切下字通用がみられるので、反切に問題はないと見ることも可能であるが、同音字の多く（茲など）の反切が「則欺反」であることからすると、「斯」は「欺」の誤りであり、本来の反切は「則欺反」である可能性が高い。

28-16b-1 𦉑 頑五反

「𦉑（『広韻』五故切、暮韻疑母）」「頑」「五」はともに疑母であり、「頑五反」は反切の体を成していない。

同音の「害」の反切が「頑互反」であることからすると、「五」は「互」の誤りであり、本来の反切は「頑互反」であるとみられる。

28-17b-7 耐 長宥反

「耐」は『広韻』では「直祐切（宥韻澄母）」。これに対し「有」は有韻であり、声調が合わない。

同音字の多く（胃など）の反切が「長宥反」であることからすると、「有」は「宥」の誤りであり、本来の反切は「長宥反」であると考えられる。

28-18a-4 𦉑 欲敢反

「𦉑」は『広韻』では「古禪切（感韻見母）」。これに対し「欲」は一等韻と原則的に結合しない以母であり、鼻字の音が音結合としてあり得ないものになってしまう。のみならず

反切下字の「敢」は感韻と反切下字の通用がみられる敢韻の見母字であり、帰字「讐」と同音と見なせるため、反切の用字としては非常に不適当である。

「欲敢反」に何らかの誤りがあるのは確実であるが、本来の反切がどのような形であったのか推測するのは困難である。一つの解決策としては「欲」が「卻（却）」の誤りとするものだが、この場合諸書にみえない「感韻（敢韻）見母」という音を「讐」に仮定しなければならなくなる。他に、『集韻』に「古暗切（勘韻見母）」という音が見えることから、「敢」は本来反切上字で、伝写の過程で反切の上下が顛倒したものとみる、あるいは『大広益会玉篇』に「古禪余瞻二切」とあることから、このうちの「余瞻切（塩韻以母）」を「欲敢反」の本来表す音であったと考えることもできよう（この場合「欲」のみが反切本来の字となる）。ただこれらの場合、どちらも反切下字が本来どのような字であったか探り難い。あるいは「欲嚴反」か。

28-19b-3 酢 倉去反

「酢」は『広韻』では「在各切（鐸韻開口從母）」だが、『説文』の音は『広韻』での「醋（倉故切、暮韻清母）」のもの¹⁸。これに対し「去」は御韻であり、韻母がやや合わない。

同音字「措」の反切が「倉互反」であることからすると、「去」は「互」の誤りであり、本来の反切は「倉互反」とであるとみられる。その誤りの理由としては、「互」の俗字に「互」があり、これが「去」に書き誤られたからと考えられる。

補遺

ここでは「反切校勘記（1）～（3）」にあるべきであったが、筆者の疎漏により脱落させてしまったもの、また、のちに考えが変わったもの、等の項目を挙げる。

反切校勘記（1）補遺

4-7b-3 往 又兩反 述本「丈兩反」に作る

以前、反切校勘記（1）では、疑問を呈しながらも祁本の「又兩反」を本来のものとして認めた（東ヶ崎 2008、p.117）。しかし述本の「丈兩反」を見るに、「丈」もまた「兩」「往」と同様に養韻の反切下字として用いられる字であり、また「又」を「丈」に誤った例が現れないことを考えると、この「丈」が反切下字である可能性もあるのではないだろうか。この場合反切の上下が顛倒していて、かつ「兩」は「雨」の誤りと判断される。本来の反切は「雨丈反」となり、この場合、反切上字が云母合口となって、より帰字「往」の音を表すのにふさわしい。

8-4a-5 争 則泓反 汪本・述本「側泓反」に作る

「争」は『広韻』では「側莖切（耕韻開口莊母）」。これに対し「則」は精母であり、声

¹⁸ 『説文』での説解は「醋」が「客酌主人也」、「酢」が「醢也」だが、切韻系韻書では「醋」が「醬醋」、「酢」が「酬酢」と、意味が逆になっている。これについて徐鍇は「酢」の注で「今人以此爲酬醋字、反以醋爲酒酢、時俗相承之變也」と述べ、徐鉉も「醋」に「今俗作倉故切」、「酢」に「今俗作在各切」と、『説文』と当時では音が逆になっていると注している。

母が合わない。

同音字「葦¹⁹」「箏」の反切が「側泓反」であることからすると、「則」は「側」の誤りであり、本来の反切は「側泓反」であると考えられる。

11-18b-2 櫛 奴垢反 述本「奴垢反」に作る

「櫛」は『広韻』では「奴豆切（候韻泥母）」、これに対し「垢」は厚韻、「垢」は候韻であることからすると、述本の「奴垢反」に従うべきである。

ただし同音字の「髡」の反切が「奴詬反」であることからすると、「垢」と「詬」のどちらかは、もう一方の字を誤った可能性もある。

反切校勘記（2）補遺

18-7b-5 𡵓 崖略反 述本「崖略反」に作る

「𡵓」は『広韻』では「[𡵓/厶]」に作り「以灼切（藥韻開口以母）」。これに対して「崖」は疑母、「崖（省の異体字）」は生母であり、声母が合わない。

同音字の多く（藥など）の反切が「胤略反」であることからすると、「崖」は「胤」の誤りであり、本来の反切は「胤略反」であると考えられる。「胤」は清世宗の諱字のため雍正年間以降は「[𡵓/月]」「𡵓」「胤」のように欠画して書かれたが、そのうちの「[𡵓/月]」あるいは「𡵓」が「崖」のように書き誤られ、さらにそれが「崖」となったものか。あるいは「崖」の字形自身、「𡵓」の影響の可能性もある。

20-6b-6 𡵓 助決反 述本「勅決反」に作る

「𡵓」は『広韻』では「徂朗切（蕩韻開口從母）」または「徂浪切（宕韻開口從母）」、これに対して「助」は崇母、かつ「決」は陽韻もしくは蕩韻。

「𡵓」の現代音の1つに zhuǎng があり、「助決反」から帰納される音の1つ（養韻開口從母）はこれに近い（ただし声調が合わない）。しかし「決」は使用頻度の高くない多音字で、反切の用字としては適切ではなく、しかも他に使用例がないため、「助決反」という反切自体が本来のものであるか、疑念が残る。

ここで述本の反切と、反切校勘記（3）の「胤」の項でその反切「勅浪反」が「勅沆反」の誤りである可能性が高いと論じたこと（東ヶ崎 2016, p.92）を考え合わせると、次のような推論ができる。すなわち「𡵓」の反切も「勅沆反」だったのが、反切下字が「決」に誤られ、さらに「勅決反」の反切が「𡵓」の字音と一致しないことを不審に思った後世の人が、「勅」を「助」に書き換えた、と考えるのである。この仮定は「𡵓」に全く関係のない「勅沆反」という反切が誤って付けられた、という仮定に基づかなければならないため、本当にこうであったとは考えにくいところがあるが、このようにでもしなければ述本の反切が説明困難である。

21-14b-5 𡵓 飄迭反 述本「飄迭反」に作る

「𡵓」は『広韻』では「呼決切（屑韻合口曉母）」。これに対し「飄」は滂母もしくは並母、「飄」はであり、声母が合わない。

¹⁹ 「葦」は『広韻』で「土耕切（耕韻開口崇母）」だが、大徐本（側莖切）・『篆韻譜』（側莖反）すべて莊母音、『集韻』で説文音とされるのも莊母音（笛莖切）である。

同音字「血」「苙」の反切が「翹迭反」であることからすると、「飄」「翹」は「翹」の誤りであり、本来の反切は「翹迭反」であるとみられる。おそらく「翹」が述本の「翹」に誤られ、さらに祁本等の「飄」に誤られたと推測される。

21-15b-1 淙 俟叩反 述本「俟叩反」に作る

「淙」は『広韻』に「蔵宗切（冬韻従母）」「士江切（江韻崇母）」「色絳切（絳韻生母）」の3音を載せる。説文の反切は、大徐本は冬韻音（蔵宗切）、『篆韻譜』は江韻音（仕各反）。これに対し、「俟叩反」の反切上字は崇母、下字²⁰は鍾韻で、以上の音のどれとも合わない。

「叩（邛）」は「淙」以外に繫伝反切に使われておらず、何らかの誤りがある可能性が考えられる。ここで「叩（邛）」に字画の類似した字を通撰・江撰で探すと、「邦」がある。繫伝反切で「邦」は「缸：侯邦反」「撞：宅邦反」のように江韻の反切下字として用いられる。これらを考え合わせると、「俟叩反」は「俟邦反」の誤りであるという推測ができる。

その他の可能性として、『集韻』で東韻三等崇母に「滌」という字があり、意味も「水聲」と「淙」に類似するので、これらの混同により「俟叩反」²¹という反切が付けられた可能性も考えられよう。ただし東韻三等崇母に用いられる繫伝反切は「崇：助弓反」である。

23-5b-3 關 職流反 述本「職流反」に作る

「關」は『広韻』では「旨亮切（彌韻合口章母）」、これに対し「流」は尤韻、「沈」は彌韻であるので、述本の「職流反」に従うべきである。

ただし同音字（劓など）の反切は「職件反」であり²²、また大徐本の反切が「旨沈切」であることを考えると、「沈」は大徐本からの竄入である可能性もある。

祁本などの反切下字「流」は、「關」の音符とされる「繇」の音の影響か。

24-17b-2 𦉑 楚𦉑反 述本「楚𦉑反」に作る

「𦉑」は『広韻』では「楚洽切（洽韻初母）」。これに対し「𦉑」は琰韻であり、韻母が合わず、また「𦉑」は諸書に見えない。

同音字「扱」の反切が「楚乏反」であることからすると、「𦉑」は「乏」の誤りであるともみなせそうである。ただし「乏」は乏韻であり、咸撰二等と三等C類韻（凡韻）は繫伝反切に通用例が存在する²³ものの、洽韻・狎韻と乏韻の間の反切下字通用は「扱：楚乏反」のみである。

ここで述本の字形と、洽韻に「𦉑（『広韻』側洽切）」という字があることを考え合わせると、むしろ「𦉑」は「𦉑」の誤りであり、本来の反切は「楚𦉑反」であるという推測ができる。あるいは「扱」の反切「楚乏反」も、かえって「楚𦉑反」の誤りという可能性があるだろう。

²⁰ 「叩」は「叩」または「邛」の異体字であるが、ここでは後者とみるべきである。

²¹ 少数ではあるが、東韻三等と鍾韻の間には「𦉑：父重反」のように反切下字が通用する例がある。

²² 「職件反」は合口字の反切でありながら、上下字ともに開口となっている。このような反切が、繫伝反切には散見され、そのほとんどが臻撰・山撰の細音舌齒音字である。おそらく頭子音や母音、韻尾の前舌性によりu介音が弱化したものであろうと考えられる。なお東ヶ崎(2011)のp. 135以下も参照。

²³ 「凡：孚芟反」「𦉑：浮檻反」など。

27-8b-3 録 然尤反 汪本・述本「然尤反」に作る

「録（『広韻』耳由切、尤韻日母）」に対し「尤」は唐韻、「尤」は尤韻であり、また同音字（柔など）の反切が「然尤反」あることからすると、汪本等の「然尤反」に従うべきである。

反切校勘記（3）補遺

1-7a-1 裸 古浣反

「裸」は『広韻』では「古玩切（換韻見母）」。これに対し「浣」は緩韻であり、声調が合わない。

これについては2通りの解釈ができる。1つは「浣（緩韻匣母）」の音が、いわゆる「濁上変去」により、換韻見母音に近づいていたとみる解釈である。反切校勘記（3）で触れた通り、繫伝反切には「濁上変去」を示していると思われる現象が散発的にみられ(p.70)、これもその1つとみなすのである。もう1つは「浣」を「玩」の誤字とみる解釈である。この場合、反切自体が大徐本（古玩切）の竄入の可能性もある。

1-10a-7 權 古澣反

「權」は『広韻』では「古玩切（換韻見母）」。これに対し「澣」は緩韻であり、声調が合わない。

これについても前項「裸」と同様、2通りの解釈ができる。1つは「澣（緩韻匣母、「浣」の異体字）」の音が、いわゆる「濁上変去」により、換韻見母音に近づいていたとみる解釈である。もう1つは「澣」を「澣」あるいは「翰」の誤字とみる解釈である。同音字の多く（貫など）の反切が「古翰反」であることを考えると、「澣」が「翰」の誤りである可能性も決して低くないと考えられる。

8-7b-3 𦉳 古晏反

「𦉳」は『広韻』では「古案切（翰韻見母）」もしくは「下晏切（諫韻開口匣母）」。「古晏反」は前者とは声母のみ一致、後者とは韻母のみ一致する。

東ヶ崎(2003)で述べたごとく、「晏」は「案」の誤りとみるのがまず考えられる(p.39)が、あるいは本来「下晏切」相当の反切が付いていたのが、大徐本の「古案切」と反切が異なることを不審に思った後世の人が、反切上字のみ大徐本のものに書き換えた可能性も考えられよう。

12-11a-6 賴 上同

これについては反切校勘記（1）の「𦉳」の項で既に触れた（東ヶ崎 2008、pp.134-135）が、不十分な点があったので、ここで再度触れておく。

「賴」は『広韻』では「洛帶切（泰韻開口来母）」。この字は諸本ともに反切が付いておらず、末尾に「上同」とのみあるが、祁本と同系の彙本（『小学彙函』および『四部備要』所収本）には「力帶反」という反切が付けられている。これは繫伝反切で最も有力な「郎蔡反（瀨など）」とは一致せず、大徐本（洛帶切）、『篆韻譜』（洛帶反）、『集韻』（落蓋切）、また王仁昫『刊謬補缺切韻』や切韻逸文等に見える反切（理大反）などとも一致しない。唯一一致するのは、同音字のうち、卷十四の「癩」の反切（力帶反）のみである。

「上同」を本来のものとする場合、『校勘記』で指摘するごとく「頼」が「購」の後ろにあったという、現行の説文と異なる文字の並びを仮定せねばならず、その妥当性が問題となる。一方で「力帶反」を本来のものと仮定した場合、諸本で「上同」とある理由を説明し難い。さしあたっては『校勘記』に従い、「上同」が本来のものであり、彙本の「力帶反」は、配列が大徐のものと同じに訂正された後、「上同」を不審に思った人が、たまたま「癩：力帶反」を参照して反切を書き入れたと考えるべきであろう。

13-8b-3 疊 田狹反

「疊（疊）」は『広韻』では「徒協切（怙韻定母）」。これに対し「狹」は洽韻であり、韻母が合わない。

同音字の多く（牒など）の反切が「田狹反」であることからすると、「狹」は「俠」の誤りであり、本来の反切は「田俠反」であると考えられる。ただ、同音字の反切の中には「牒：田俠反」もあるため、「狹」は「挾」の誤りの可能性もある。

(反切校勘記 了)

参考文献

- 梅 広 (1963) 「説文繫伝反切的研究」国立台湾大学中国文学系碩士論文
東ヶ崎祐一 (1999) 「繫伝反切における匣母、云母、喻母」『東北大学言語学論集』第 8 号、東北大学言語学研究会、pp.35-52
----- (2003) 「『説文解字繫伝』にみられる反切下字混用——梗摄入声と曾摄入声、および外転一等韻と二等韻の間の——」『中国語学』250 号、pp.32-49
----- (2008) 「『説文解字繫伝』反切校勘記 (1) —三本異同考・上—」『東北大学言語学論集』第 17 号、東北大学言語学研究会、pp.111-137
----- (2009) 「『説文解字繫伝』反切校勘記 (2) —三本異同考・下—」『東北大学言語学論集』第 18 号、東北大学言語学研究会、pp.59-88
----- (2011) 「漢字音における円唇性をめぐって」『日本學研究의 地平과 再照明』(李淑子編)J&C、韓国、pp.115-140
----- (2016) 「『説文解字繫伝』反切校勘記 (3) —内的再構による—」『東北大学言語学論集』第 24 号、東北大学言語学研究会、pp.69-93
王 力 (1982) 「朱翱反切考」『王力文集』第 18 卷 (山東教育出版社 1991)、pp.199-245
嚴 学寤 (1943) 「小徐本説文反切之音系」『民族研究文集』(民族出版社 1997)、pp.1-57
張 慧美 (1988) 「朱翱反切考中的重紐問題」『大陸雜誌』第七十六卷第四期、pp.152-169
張 世祿 (1944) 「朱翱反切考」『説文月刊』第 2 号、pp.117-171

(韓国 慶熙大学校 外国語大学日本語学科 助教授)
ytougasaki@yahoo.co.jp